

おはようございます。
長崎大学人、河野茂です。

本日は、多文化社会学研究科長で宗教学がご専門の教授、滝澤克彦先生のお話です。

~~~~~

プーチン大統領が 2021 年 7 月に公開した論文のなかには、ロシア人とウクライナ人とのあいだの歴史的な親密性について記されており、今回の侵攻を正当化する彼の歴史観をうかがい知ることができます。

そこで、彼はスラブ系民諸族が歴史的に共有してきた言語や文化、特に精神的連帯の基礎にある正教会の意義を強調します。

彼が言うには、現在そのような「我々の精神的(あるいは霊的)な結束が攻撃されている」というのです。

この言葉が何を意味するのか、そこにある複雑な事情と歴史的背景に触れながら、宗教的な観点からウクライナの問題について考えてみたいと思います。

ウクライナ人の多くは、ロシア人と同じ正教会を信仰しています。

正教会とは、ローマ帝国の国教であったキリスト教が 1054 年に東西に分裂して以降の(西のローマ・カトリックを除く)東方の系譜に連なる教会のことを指します。

ロシアにおける正教会は、10 世紀末にキエフ大公国の大公ヴォロディーミルが正教会に改宗したことに由来し、モスクワ大公国やロシア帝国の国教として発展、現在世界最大の正教会組織となっています。

ウクライナの人びとは、そのロシア正教会の管轄下にある正教会を信仰してきました。

ところが、19 世紀以降ロシア帝国の崩壊やソ連の解体などによってロシア正教会下の正教会に独立の機運が高まり、ジョージアやチェコ・スロバキアなどの正教会がロシア正教会から独立しています。

ウクライナでもソ連解体によって独立の動きが現れ、先述のロシア正教会下のものに、ウクライナ独立正教会とウクライナ正教会キエフ総主教座という 2 つの独立教会を加えた 3 つの正教会が併存する事態となりました。

さらに、2019 年には後者の 2 教会が統合してできたウクライナ正教会を、正教会の最高権威であるコンスタンティノープル総主教座が承認したのです。

これが、プーチンがロシア人とウクライナ人の精神的連帯への攻撃とみなしたことです。

しかし、もともと正教会は、国ごとに教会組織があったとしても教義には違いがない一つの宗教です。

また、先述したロシア正教会下の正教会もすべて「親露派」であると言えるほど単純なものではありません。

今回の事態は、いわば国家間の問題、さらに地政学(NATO とロシアの対立)に教会が巻き込まれてしまったものです。

宗教は、本来、国家を超えた普遍的な信仰や信念にもとづくものとも言えるでしょう。

それにもかかわらず、国家は宗教をその信仰という力の大きさゆえに自らの意図に利用しようとしがちです。

国家やナショナリズムが宗教に結びつけられると、事態はより複雑になり泥沼化します。

特に、マルクス主義にもとづき反宗教政策を行ってきた社会主義諸国の多くでは、教会は国家との妥協的な協力関係を結ぶ傾向がありました。

そして、社会主義体制崩壊後、人びとは抑圧されていたナショナリズムを宗教をよりどころに取り戻そうとし、国家もそれを利用しようとしてきました。

このような国家と宗教の緊密な関係性がロシアやウクライナに生じていたことも認識しておくべき問題です。

さて、このような平和に関わる問題を常に身近なものと捉えて考えてみるこそ、長崎に暮らす者の使命と言えるでしょう。

現在のロシアと戦中の日本の類似性は多くの場所で指摘されていますが、国家と宗教の関係についても同様の観点から考えてみるができます。

また、現在なされている憲法改正論議においても、国家と宗教の緊密化をめぐる問題(20 条)についてきちんと認識しておくことは重要と言えるでしょう。

※ ロシア侵攻前のウクライナの宗教事情については、高橋沙奈美「危機の時代における公共宗教としてのウクライナの正教会ーポスト社会主義時代の新しい公共宗教のカタチ」櫻井義秀編『アジアの公共宗教ーポスト社会主義国家の政教関係』(北海道大学出版会、2020 年)に詳しいので、ぜひご一読ください。

~~~~~

ありがとうございました。

3回のメール配信を通して、私たちは、様々なことを学びました。学んだあとは、それぞれの判断で行動してほしいと思います。

<https://readyfor.jp/projects/nagasakiuniversity-ukraine>

長崎大学としては、上記のクラウドファン্ডを立ち上げて、ウクライナの学生たちの学びの継続を支援しています。

『戦争を知らない子供たち』が『戦争の渦中にいる子供たち』を支援することは、本学の歴史を踏まえると当然のことと思います。

ぜひ、学生ひとりひとりが、職員ひとりひとりが、戦争を学び、行動して頂きたいと思います。

3回のメールを読んでくれてありがとう。